平成２６年６月１日発行

# かまにし

発　行　地域力推進蒲田西地区委員会
編　集　地域情報紙編集委員会
第５２号

## わがまちの顔
## 「下町ボブスレー」で世界に挑む
## 師岡（もろおか）　正雄（まさお）　さん

冬季オリンピックの競技種目にもなっているボブスレーですが、残念ながら日本では最近まであまりなじみがありませんでした。長い歴史を持つ欧米の各国では、イタリアがフェラーリ、ドイツがBMW、イギリスではマクラーレンなどの超一流企業がマシンの開発をサポートしてきました。しかし日本ではこれまで外国製の型落ち品を使っていたのです。

それが近頃にわかに注目を浴びるようになってきました。三年前の二〇一一年九月、大田区産業振興協会の職員が区内の町工場に呼びかけ、それに応じた協力工場がプロジェクトチームを作って大田ブランドのボブスレーを完成させたからです。それが「下町ボブスレー」で、残念ながら今春のソチオリンピックでは採用されませんでしたが、四年後の平昌（韓国）オリンピックでの採用をめざし改良を続けています。

このところ、『下町ボブスレー』の本が相次いで出版されて話題になり、またNHKテレビでドラマ化されたり、特集番組が放映されるなど大きな反響を呼んでいます。その「下町ボブスレー」の協力工場が蒲西地区にあるということで、お訪ねし話をうかがってきました。

「©2014 下町ボブスレー#3」

有限会社師岡鈑金製作所は、環八通りの蒲田陸橋手前の信号を富士通側に曲がって最初の角、御園自治会館の筋向いにあります。創業者の父、故久雄さんは戦後間もなくから個人事業者として工場を経営してきましたが、昭和三十三年に法人化して以来、現在は息子の正雄さんが後を継いで取締役を務めています。

まず最初に見せていただいたのが、三月にNHKが放送したドキュメンタリー「下町ボブスレー」で、まるで師岡さんを主人公にしたような番組でした。「氷上のF1」ともいわれ、時速一四〇キロ近くの猛スピードで一三〇〇メートルのコースを五十秒台で走り抜け、一秒の何分の一という微差で勝敗が決まるボブスレーの精密なマシンを作るには、妥協の許されない精度が求められます。師岡さんが担当したのはフロントアクスルとリアアクスルと呼ばれるフレームの大事な部分で、それぞれ厚みなど微妙に変えて三種類ずつ、しかも二機分なので大変な技術と労力のいる作業でした。番組では、材料を溶接する前に加熱処理するなど納得がいくまで真摯に取り組む、まさに職人気質の師岡さんが映し出されていました。NHKは何度も取材に来て撮影していったそうです。師岡さんは無償でプロジェクトに参加していて、材料の一部などは自分で負担しているそうです。

師岡さんは毎年地元の中学校の職場体験を受け入れています。それは「若い人たちに町工場に興味を持ってもらいたい、世界に一つだけのものを作り出す喜びを味わってほしいから。」と目を輝かしていました。

（取材　多田委員）



## 蒲田の観覧車が消える？

蒲田のシンボルとして親しまれてきた東急プラザ屋上の観覧車がビル改装のため、三月二日に営業休止となった。昭和四十三年（一九六八年）十一月一日の東急ビル開業とともに四十五年間営業を続けてきた、都内で唯一の屋上観覧車をもつ遊園地が姿を消してゆくことになった。

平成元年にリニューアルされた「グレ太の観覧車・フラワーホイール」は二代目であった。初代は「お城観覧車」で、ともに長い間子どもたちに親しまれてきた。

高さは約十メートル、一周三分半で四人乗りのゴンドラを九基備えていた。眼下には東急線や蒲田の街並み、晴れた日には都心の高層ビルや遠く富士山を望むこともできた。

蒲田は東京のもっとも南に位置している繁華街である。東急沿線のターミナル駅として、気楽で親しみやすい下町的雰囲気の商店街、歓楽街を併せ持つ地域でもある。幼い頃に親に連れられ、買い物のついでに訪れた屋上遊園地は、思い出が一杯つまった楽しい遊び場であった。

デパートの屋上遊園地は昭和二十五年ごろから始まった。現存する屋上観覧車では名古屋三越栄店が最古で、昭和三十一年製である。昭和三十年代から、昭和四十年代半ばまでがデパートの屋上遊園地の全盛期であった。

しかし、昭和四十七年の大阪千日前デパート、翌四十八年、熊本大洋デパートの火災と、ともに百人を超す死者をだす災害が続いた。対策として消防法の改正がなされ、屋上利用の規制が厳しくなった。さらにゲームセンターや本格的なテーマパーク等の娯楽施設に押され、屋上遊園地は次々に姿を消していった。

そもそもモーター式の観覧車の誕生したきっかけは、一八八九年にフランス・パリ万博でエッフェル塔が建てられたことに起因する。四年後のアメリカ・シカゴ万博では、エッフェル塔に対抗するために、多くの建築家がアイデアを出し合った。その結果、タワーを二本立て、その間に軸を渡し、直径七十六メートルの車輪の周囲に三十六基のゴンドラを吊るした世界初の大観覧車を建造し、世界中を「アッ！」と驚かせた。

時代とともに街の風情は変わっていく。これは致し方ないことではあるが、親子三代で楽しんだ屋上観覧車の思い出は、それぞれの心の隅に、ぜひ残しておきたいものの一つであろう。

地元からは、今年十一月、改装後の再開を願う声も上がっているが、東急プラザ側は未定とのことである。

（取材　伊藤、下山、飯嶋委員）

かまにし17をお読みいただき、ありがとうございます。情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などございましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五

## 事務局からのお知らせ

四月一日から、蒲田西特別出張所長に着任いたしました「山浦賢一（やまうら　けんいち）」です。

今年で十三年目（創刊日は娘の誕生日であり何かの縁を感じております）と長きにわたり、地域の歴史・文学・人物など多方面にわたる情報がとても詳しく記されているこの「かまにし17」を楽しく、また新たな発見をしながら拝読させていただきました。この素晴らしい地域情報紙をたくさんの方々にご覧いただき、蒲田西地区に愛着を持っていただける方がさらに多くなっていただけるよう事務局一同、さらに努力してまいります。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

### 蒲田西特別出張所管内

| | | |
|---|---|---|
| 人口 | 男 | 31，643人 |
| | 女 | 29，252人 |
| | 計 | 60，895人 |
| 世帯 | | 33，850世帯 |

平成26年5月1日現在

# 小沢昭一
## 蒲田は心のふるさと

蒲田はまだその頃、池上寄りへ向かえば森あり、川あり、畠あり、ハラッパありと、子供にとって絶好の自然環境。一方、「松竹蒲田撮影所」も近く、家の前を当時のスターが往き来して、若手の女優さんがわが家へ遊びに来てたりもしてました。・・・夜ともなれば、夜店が週三回も出るという、いわば文化的環境も新開地なりに充実していて、私にとって刺戟の多い毎日でした。私の芸能的な下地がここで培われたのは確かで、蒲田での十年間あまりは、私にとっての〝黄金時代〟。わが心のフルサトは蒲田なのです。

（引用：二〇〇四年二月六日発行東京新聞・わが街わが友　蒲田①）

駅のそばに大きな公設市場があってね。お袋の買い物についていくと、二階の食堂でカツを食わせてくれた。ペチャンコの薄いカツだけど、あれはうまかったなあ。子供時分のとびきり上等のご馳走でありました。・・・

子供時代の食い物といえば、屋台の寿司も忘れられないねぇ。夜も更けて寝ていると、「起きろ！寿司を食わせてやるから」と仕事を終えた親父が布団を蹴飛ばして僕をたたき起こすんですよ。当時の蒲田の街は京浜工業地帯を控えていたから、場末だけれど、わりに活気がありました。・・・眠い目をこすりながら親父とならんで黙々と食べたもんです。

（引用：二〇〇九年四月一日発行ニチレイグループ広報誌・OriOri第十四号）

中学生になってからは、専ら寄席通いを続けました。これも収集癖なのか、東京中の寄席を廻ってましたな。戦争が次第に激しくなって、中学生も勤労動員で工場に通うようになりましたが、残業の前に束の間の演芸会が毎夕催されまして、生徒の中のオッチョコチョイが次々と芸をやらされる。私もそのオッチョコチョイの一人で、・・・

ある日空襲警報下の寄席で、客は私一人。気がつくと後ろでもう一人笑ってる奴がいた。見ると、同級生の同じオッチョコチョイ仲間の堺正俊クン。後のフランキー堺でした。・・・

（引用：二〇〇四年二月十日発行東京新聞・わが街わが友　蒲田②）

女塚町（昭和１５年の地図）

### 小沢昭一氏死去

ＴＢＳラジオで昭和四十八年に放送を開始した『小沢昭一の小沢昭一的こころ』は、平成二十四年十一月十六日の最終回までの三十九年間、放送回数は実に、一万三百回を超える長寿番組であった。

適度にお色気をにじませ、軽妙な揶揄と風刺を聞かせた、独特の語りが回を追うごとに話題となって、人気が広がった。

個性を売りにした俳優として、映画に舞台に大活躍した小沢昭一であったが、平成二十四年十二月十日、前立腺がんのため都内の自宅で死去。八十三歳であった。

### 幼・少年（女塚）時代

昭和四年、現在の世田谷区代田付近で生まれ。四歳の時、父親が写真館経営のため、高円寺から蒲田区女塚に移転してきた。

近くの姫百合幼稚園を卒園、昭和十一年、相生小学校に入学。この頃よりラジオで放送される落語や漫才をよく聞くようになった。

あだ名はオッちゃん、またはショウちゃんと呼ばれ、一人っ子の割には早熟で、遊びのグループではつねにリーダー格であった。

学芸会では、主役、シナリオから演出まで一人でこなし、休み時間には落語の一席を披露するなどして、仲間の人気者であった。



### 中学・海兵学校（道塚）時代

昭和十七年、麻布中学へ入学、その年に、父親の心臓病が悪化し、写真館を閉め道塚へ移転した。

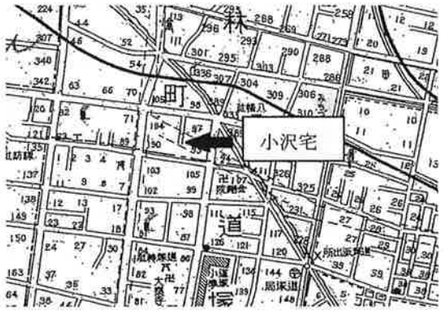
昭和二十年、麻布中学三年終了後、海軍兵学校予科に入校する。

兵学校への受験勧誘に来た先輩兵学校生徒の、短剣を下げた制服姿に胸をときめかし、また映画『海軍』の主演スター、山内明の将校にあこがれ、『勝利の日まで』での海軍士官、上原謙の格好よさが目に焼きついた。腰がピタッとしまった紺のホック留めのジャケットに金色の短剣と真っ白な手袋、当時、女の子の憧れの的であった。それも海軍を志望した理由のひとつでもあった。

昭和十九年、海軍兵学校は採用年齢を、中学二年終了からに引き下げた。それを知った昭一はすぐさま受験を覚悟し、同年十二月、広島県江田島まで行き、入学試験を受けた。

昭和二十年二月、「カイヘイゴウカク」の合格電報を手にした。二万人の応募者から選ばれた、四千人の合格者の一人だった。

三月三十日、保護者の付き添いは禁止されているにもかかわらず、母親は長崎まで同道し、父親も病床から起き、洋服に着替えて、目蒲線「道塚駅」まで歩き、昭一を見送った。




小林・道塚町（昭和１５年の地図）

### 空襲と敗戦

昭一が長崎にたった五日後の、四月四日、続けて、四月十五日と城南地区は米軍の空襲を受けた。四月四日は爆弾投下が主であったが、道塚町は大きな被害をうけた。小沢家に近い道塚神社では、境内に設けた警防団詰所が爆弾の直撃を受け、多くの死傷者を出している。

昭一の両親は、奇跡的に無事であったが、家は爆風で半壊し住める状態ではなく、防空壕での生活を余儀なくされた。

つづく、四月十五日の空襲は大規模で、特に旧蒲田地区は焼夷弾の波状攻撃をうけ、壊滅状態になった。そこかしこで火の手が上がり、身の危険を感じた母親は、病身の父親を庇いながら、着のみ着のままで、猛火のなかを何とか安全な場所に逃げ延び、九死に一生を得た。

都内の知人宅を二転三転としたが、最後は縁戚を頼り、長野に落ち着いた。その間、昭一には心配をかけまいと「強制疎開で長野に移った」とだけ連絡した。

米軍上陸に備え、兵学校では長崎県針尾から山口県防府の仮校舎に移ったが、毎日のように米軍艦船機の来襲をうけ、そのたびに裏山の防空壕に逃げ込んだ。八月八日には、学生宿舎は米軍の焼夷弾で全焼。一週間後の八月十五日の終戦で海軍兵学校生活は、わずか四ヶ月余で終りを迎えた。

三田尻駅から無蓋貨車に詰めこまれ、広島通過の際は、この世とは思えぬ光景に遭遇し、とにかく、両親の住む群馬県四万温泉（母方の世話で長野から移動）までたどり着いた。

九月中旬、麻布中学校四年に復帰、親友の加藤武にも再会した。

翌二十一年、加藤武、大西信行らと共に演劇部を立ち上げたのが芸能生活に入るきっかけとなる。

### 想い出の旅

小沢昭一氏は昭和五十年前後に一度、道塚を訪れている。「蒲田から目蒲線で一つ目の駅が道塚駅だったが、行ってみたらその駅はなくなっていた。道塚という町名も改正されて西蒲田（新蒲田の誤り）であった。」と述べている。すぐに小沢宅のあった旧地を尋ね当てることができ、隣家の地主さんを尋ね、仕事師か植木屋さんと見える、ご主人とも話ができたと、語っている。

小沢氏が訪ねた地主さんとは、新蒲田二丁目の多田新一氏であった。

筆者は多田新一氏にお会いし、当時の話を伺った。三十数年も前の話であったが、小沢氏の訪問の様子をよく覚えていた。戦災時、新一氏は疎開でこの地から離れていたが、東側の路地一本はなれた所に旧小沢家が建っていたことは覚えていると語ってくれた。

（戦災当時ここの住所は蒲田区小林町九十三番地であった。道塚町は前の道路から先になる。小沢氏自身は町名より、駅名を強烈に覚えていて道塚町と思い込んでいたのだろうか）

### 参考文献

『わた史発掘』　小沢昭一

（取材　都築委員）